

「歩くスキー」の概念の明確化に関する一考察

○ 三浦 裕 (北海道教育大学)

長屋 昭義 (旭川大学女子短期大学部) 小川 幸次 (北海道東海大学)

キーワード: 歩くスキー、概念、内包、外延

【 1. 問題の所在および本稿の課題 】

近年「歩くスキー」は手軽なスポーツとして普及してきている。この言葉は体育・スポーツ用語辞典においては見あたらず、定義がなされていないため、現在のところテクニカルタームとして確立されてはいない。このため「歩くスキー」についての概念が不明確なまま、「歩くスキー」というスポーツ活動が展開されている一方で専門領域における研究対象ともされているのが現状である。したがって今後の「歩くスキー」研究の方向を決定する上で、「歩くスキー」についての概念を明確にすることは必須かつ急務な課題である。

【 2. 研究の目的 】

ある概念が不明確な状況において、その概念を明らかにしようとする作業のもつ意味は、唐木 (スポーツの概念、不味堂) が述べるように、不明確な概念が用いられている現状の批判・変革、科学的な認識の深化である。しかし、概念を明確化することのみにより、関連する全ての問題が解決され得るわけではない。これまでに「歩くスキー」に関しては、いくつかの概念化が試みられているが、いまだ共通した認識はなされていない。このため本稿においては、一連の「歩くスキー」研究を進める上での一つの段階として、概念という視点から分析し、「歩くスキー」の概念の明確化を試みた。

【 3. 研究の方法 】

ある概念を明確にする場合には、いくつかの方法が考えられるが、「歩くスキー」の概念が不明確な現状であるため、本研究では「歩くスキー」自体の概念の内包と外延を明確にする方法を用いた。概念 (言葉の意味内容) は、内包 (その概念の本質的諸特性の総体) および外延 (その適用範囲) で構成されている。本研究では「歩くスキー」のとりえが記述されている文献を基に、「歩くスキー」の概念の内包・外延について分析・検討を行い、理論枠としての概念化を試みた。対象とした文献は、歩くスキー関連文献143 (1989年、北海道体育学会) のうち、概念の明確化に有効と思われる著書および報告書、計11である。

【 4. 概念の枠組みの設定 】

「歩くスキー」についての明確な定義 (概念の内包を明示的に規定すること) が存在していない状況は、この概念の内包と外延とが未整理であることを示唆している。このため、「歩くスキー」の概念の明確化を図るためには、ある枠組みをもって内包と外延を整理する必要性が生じる。そもそも概念とは、人々が存在対象をよりよく把握するために、主体的に作り出す理想的モデルであり / その形成過程には明らかに後天的な学習経験が関与している / したがって条件により同一概念の内包は変化する (市井三郎、社会科学大事典、鹿島研、1970)。このため本稿では「歩くスキー」という言葉が提唱され始めた背景に存在する思い (性質づけ) を内包の共通する理論的な枠組みとして設定した。今村 (文献参照) は、当時流行していたスキー現象を競技・技術偏重、環境偏向 (時間・交通・場所)、経済性などから、人々の環境生活に関係なく存在している画一的なスキーとしてとらえた。そしてこれらを背景 (現状批判) として、冬の自然的環境における主体的・自主的活動の

場を通して、健康で豊かな人間生活を生活環境の中に求めようとする「歩くスキー（現状変革）」を理念型において提唱した。したがって、これらを整理すると内容的に重複するものの、内包の枠組みを大きく非競技性、日常性、経済性、環境、健康として設定することができる。なお、ここでは外延の枠組みを他の類似したスキーへの適用範囲とした。

【 5. 結果と考察 】

《内包》「速さを競うものでもないし、他人と競技するものでもない(対象文献 3.以下同様)」などに非競技性の観点をみることができる。これは競技との区別、あるいは競技性の非存在や貧弱さの意味であり、「歩くスキー」が競技を目的とする性質のスキーではないことを示唆している。日常性は「自分の生活の中で、いつでも、どこでも、誰でも手軽にできる(3.)」ことを意味し、「気楽に散歩にでるような気持ちで、雪の山野を散策するスキー(8.)」という文章がこれに相当する。この枠組みは、日常の生活環境に対応したスキー形態を重視していると言えよう。「アルペンスキー用具より値段はずっと安く・・・リフト代もかからない(6.)」などは、他のスキー形態よりも「歩くスキー」が経済性に優れている点を指摘している。この枠組みは一般市民への普及という観点においても重要な点であると同時に、「歩くスキー」が機械力を利用しない自然という場でのスポーツであることも意味している。環境は、その言葉の意味する内容は広いが、ここでは「いつ、誰でも、どこでもできる歩くスキーは、いわゆる“作られたスキー場、などを必要としない(3.)」という文章にみられるように、主として自然環境・施設・交通・用具などを対象としている。また「平地・丘陵など冬の自然の横の空間を利用するスキーである(11.)」というように、スポーツ空間もこれに含まれる。健康面について端的に表現しているのは「主として身体と精神を高揚させる健康分野のスキー(8.)」という文章であり、またこれに加えて社会的な面としては「グループや家族でも楽しめる(8.)」などを挙げることができる。《外延》「スキーラングラウフなど、まちまちな名称が使われているがそれらを総称して歩くスキー(10.)」とその適用範囲の広い枠組みもあるが、「ある目的を持ったそれぞれ異なったスキーである(1.)」というように、「歩くスキー」と他の類似したスキーとは同一ではない、とする枠組みをもつものが多い。したがって全体的としては適用範囲が狭く、外延量は少ないということになる。一般に内包が多くなると外延は少なくなる(前掲書)。

【 6. まとめ 】

以上のことから、「歩くスキー」の概念についてまとめると、「歩くスキー」とは『いつでも、どこでも、だれでもが、手軽に、一人でもまた家族や友人などと一緒に、歩きやすい安価な用具を用いて、しかも他人とタイムを競わず、自然と親しみながら体力の向上や健康の維持、さらに楽しみなど冬季の生活を豊かにするために、野外の雪上を歩いたり、滑走したりする自己発見の身体文化である』、ととらえることができよう。

【 対象文献 】 1.北海道教育大学旭川分校寒冷地体育研究会 歩くスキーの理論と実践 同研究会 1974, 2.北海道他 歩くスキーガイド・ブック 同左 1976, 3.今村他 歩くスキー 北海タイムス 1976, 4.丸山庄司 歩くスキー入門 大修館 1979, 5.佐藤隆他編 学校スキーの計画と指導 第一法規 1976, 6.浮田義巨 歩くスキーのすすめ どんねこ書房 1989, 7.ヨコヤマ・ノルディックスキー・スクール 歩くスキー 成美堂 1980, 8.(財)全日本スキー連盟 日本スキー教程 スキージャーナル 1986, 9.同左 日本スキー指導教本 1984, 10.同左 1987, 11.同左 スキーと安全 1987.